

西宮文学案内 第1回「夙川大検定」

日時：2011年10月1日（土）14時から
場所：夙川学院短期大学キャンパス

河内：成田家さんという、もなか屋は、夙川の羽衣橋の横、グリーントウンの横にあります。歌舞伎ファンにとっては非常に重要な店です。成田屋というのは市川團十郎家の屋号であります。團十郎、海老蔵は成田屋で、昔、関西には市川寿海という名優がいました。その養子が市川雷蔵ですが、みんな成田屋です。これは歌舞伎ゆかりの銘菓なので、劇聖、といわれた明治の市川團十郎、九代目の團十郎が大阪で出演しましたときに、関西の團十郎ファンに配った、もなかです。いま残っているのがその店なんですね。いまは夙川名物です。

西宮は洋菓子、スイーツの店として売り出していますが、和菓子も結構ありますので、その一つとして頑張っています。もともと大阪に本店があって、それが大正から昭和にかけて阪神間に移ってきました。大阪は戦争で焼けましたので、こっち方面にきた店がいくつかありますね。例えば、残念ながらこのたびなくなりました、はり半。心齋橋北詰にありました有名料亭です。日本で初めてテーブルを入れた料亭だそうです。はり半は、昭和の初めごろに甲山に別の店を出したわけですが、戦争で店が焼けてしまって、西宮が本店ということでやっていました。日本を代表する料亭ということで、成田空港にも出店していたんですが、残念ながら閉店になりました。あそこはご主人が美術評論家として有名な方で、現在、兵庫県立陶芸館の館長をされていますが、国立大学の教授で料亭を営んでいるのはあの人だけといわれていました。

今回に関しては、私の独断と偏見でやや人物中心の検定試験になっています。できれば今後も年に一度ぐらい続けていきたいと思っていますが、自然や環境、土木といったこともどんどんやってみたいんですが、私が完全な文化系の人間ですので、今回に関しては人文的なものが多めになっております。どちらかといえば、属地主義より属人主義、いわゆる郷土史だと土地そのものの歴史を取り上げることが多いわけですが、阪神地区の場合、人というのが非常に重要になります。美術館にも大谷記念美術館というように名前が付いていますし、夙川公民館も松下記念ホールという名前が別に付いています。大谷何々、松下何々という、実業家の名前が付いているわけです。夙川にお住まいになった方の名前を付けているということになります。

西宮は文学作品の舞台としてもかなり厚みのあるところですよ。例えば、カトリック夙川教会は遠藤周作さんが洗礼を受けたということで、日本を代表するキリスト教作家の遠藤

さんが洗礼を受けたところです。あれはネオ・ゴシック建築の大変貴重な建物です。カリヨンという鐘を組み合わせたものが日本で最初に取り付けられた教会だそうです。幸い震災でも残りました。ただ、1994年末に取り付けた豪華なパイプオルガンが一度も使わずに阪神・淡路大震災で壊れてしまったんですね。非常に残念なことでした。

日本テレマン協会というバロックの楽団の練習場が地下にあります。教会が教会音楽を演奏するというのはヨーロッパでは当たり前のことですが、日本では、教会音楽もホールで聴いていましたので、当時、非常に斬新だったわけです。夙川教会の教会音楽のコンサートというのは。そういう、いろんな意味での名所がありますので、そういうところにしてぼって問題をつくってみました。

ちょっとご紹介したいのは、ここにいる小西巧治さんです。いま団塊世代の星といわれています。小西さんから発表が二つほどあるそうです。ちょっと聞いていただきたいと思います。小西さん、どうぞ。

小西：いま河内先生からご紹介いただきました小西と申します。よく西宮市文化振興財団の関係のお手伝いをさせていただいています。いま二つほど皆さんにご紹介してほしいという話がありましたが、最低、夙川に関して、結構、全国的に情報発信された例が一つと、あとは中国に出た話と二つあります。昨日、一昨日の新聞にも出たと思うんですが、まず最初の方が、『文学界』という雑誌があります。これは文藝春秋社から出しています文芸誌で、おそらく日本ではトップの文芸誌だと思います。これの8月号に鈴木和成さんという、村上春樹研究では非常に有名な先生が『地震の後、村上春樹の神戸に行く』という二十何ページの作品を発表されました。タイトルは「神戸に行く」なんですが、中身を読みますと、ほとんど西宮のことといえますか、西宮のそれも主に夙川近辺の話が中心です。西宮神社、それから香櫨園浜も含めて、この辺のことが書かれているんです。先生がいわれるには、村上春樹の作品のなかに出てくる川とか、いろいろな情景の、先生はジェネシスという言い方をされますが、ジェネシスというのはいわゆる創世記という言い方もしますが、この先生は起源という言い方をされますが、これはまさに西宮のここにあるんだという、われわれでもそこまで言えないようなことが書かれていまして、えべっさん筋を村上春樹ロードと呼ぼうなんて書いてあるんですね。鈴木さん自身が、この地区を非常に気に入られたということで、ぜひとも『文学界』8月号をお読みいただければと思います。図書館にもあると思いますし、一度、お読みいただければ。こういう見方であります。

鈴木さんが西宮神社イコール『海辺のカフカ』の神社、高松の神社というように文芸評論的に証明されたというところがありまして、私たちにとっては非常にうれしいことです。

もう一つ、いま阪神電車の各駅で、阪神沿線文学散歩、物語をめぐる旅というちらしが配られています。これはただでもらえます。3万枚配られたんですが、実は、これとそっくり同じ内容で中国語で1万部刷ったんです。その1万部は何に使ったかということなんですが、その前に実は、いま西宮にお住まいの毛丹青先生、神戸国際大学の先生があるが

ままの日本を中国に紹介しようということで、『知日』という雑誌を今年1月に出しました。このなかに、阪神沿線村上春樹の心象風景というかたちで中国に阪神沿線を紹介されています。

これはどういうことかという、阪神電車さんも中国からの観光客を神戸方面に呼びたいという意図があったんですが、それを毛丹青先生に相談したところ、ただ単に阪神沿線はこういうところですよというよりも、何か頭に付けた方がいいやろうと。例えば、われわれがアメリカのアトランタで、アトランタへ行きませんかというのと、『風と共に去りぬ』のアトランタへ行きませんかというのと、どちらが行きたくなるかというようなことだと思うんですね。そこで毛丹青先生が、それを一つ発案されまして、村上春樹の心象風景、これを写真展として中国にアピールしようということで、この3月に天津の美術学院の先生が5人ほどこちらに来られて、写真を撮られました。それを向こうに帰って作品にして写真展をしようということになりました。今月が天津、いま上海でやっています。11月に行われた神戸ビエンナーレで、いわゆるBB美術館というのがあるんですね。いわゆる県立美術館の手前なんですが、あそこにシマブンビルというビルがあります。神戸吉兆なんかが入っているビルです。そのBBプラザ美術館というところで、この写真展が行われます。そのあと、また北京へいきます。今度、北京では日本大使館の関係のところでもやるそうです。だから現地では、非常に筋のいいイベントになっています。そういうイベントのパンフレットなんですね。

実は、その写真展のなかでも、特に写真家の先生が非常に西宮が気に入ったということで、ぜひとも西宮に住みたいとまで言われているんです。「写真撮影が終わったとき、特に印象深かったのは夙川公園に行ったときのことだ。そのとき心が瞬間的に何か憑かれたように一気に川岸にかけつけて、岸辺にきれいに咲いた花を楽しんだり、淡い香りのなかで小魚が泳ぐのを見る子どもの笑顔を見つめたりしていた。これらの風景こそ、私の心の中にひそんでいた理想的な構図だった。撮影のあいだに、関西テレビの記者に日本に来てから一番印象的な風景は何ですかと聞かれたときに、即、夙川公園と答えた。この川の上にかけられた小さな石の橋、ちょうど香櫨園の浜の方にあります。少年村上春樹もよく通ったところではないかと想像できる」。というぐらいまでほれこんでおられるということです。実は、あまりまだ日本ではそういうことをいわれていませんが、中国では、いま新聞等で何百万人以上の人がこれを見えています。そんなことがありまして、この2つが最近、日本国内及び中国、海外に発信されている夙川の姿だということでご紹介しました。

河内：小西さんは村上春樹と同じ年代だそうですね。クラスメイトではないけれども、小西さんの同級生の方に村上春樹の同級生がたくさんいらっしゃる。村上春樹は浜脇小学校に通っていて、浜脇小学校の途中で西町香櫨園小学校が分かれてできて、そちらに移られて、芦屋の精道中学、神戸高校に通われたわけですね。63歳になられますが、いま定年になって、このへんで時間と暇のある62歳、63歳の方はみんな村上春樹の同級生だということです。

今年、ノーベル文学賞を受賞する可能性が1割と5割の間、3割、4割はあると思います。これはかなり高い確率なわけですが、ノーベル文学賞を受賞しますと、またあらためて夙川に新聞記者が来られると思います。こういう問題が今日の検定に出るかどうかは分かりませんが。

そういう目で見ると、村上春樹の小説『1Q84』のなかには西宮ヨットハーバーが出てきますし、『海辺のカフカ』にお椀のような形をした山が出てくるのですが、たぶん甲山をイメージしているのではないかと思います。原風景と思われるものが出てきますね。

私たちも夙川はもちろんいいところだとは思っていますが、中国の写真家の方がもっとも印象に残るところだと言っている、その理由は何かということを少し考えたいと思います。例えば、芦屋川はきれいで調和の取れた景観ですが、夙川は海岸から山へ向かって歩いて行くと、結構、風景が変わるんです。道路を横切るたびに、鉄道を横切るたびに風景が変わっていく。阪急とJRの間なんかは、見晴らしのいい区間があり、それから、阪急の苦楽園口と夙川の間はうっそうと茂った桜の並木道があると。南北で彩りが変わってきてかなり変化に富んでいるし、現実にもたくさんのお作家や文化人が住んでおられます。

大谷記念美術館が沿道では一番有名ですが、昭和電極の社長である大谷さんが寄付された美術館で、私が甲陽学院に行っていたときには、大谷さんのご自宅でしたが、そのあと美術館として寄贈されました。ですから、西宮市立大谷美術館じゃないんですね。つくったのは西宮市ではありませんが、運営しているのが西宮市ですので、西宮市大谷美術館となるわけです。この大谷一族はホテルニューオータニの大谷と同じ一族です。

それから、小さな美術館というと、白鷹さんの持っている辰馬考古資料館。これは松下町の川沿いにありますが、これはまた渋い美術館で、銅鐸を展示しています。あまりエンターテインメント性はありませんが、本当に専門的な美術館です。先代の白鷹の辰馬社長が考古学者でしたので、生涯集められたものを展示しています。そのおかげで県内の重要文化財の数がだいぶ増えています。同じように重要文化財を持っているのは、かなり山の手ですが、黒川古文化研究所です。黒川古文化研究所は、黒川木徳証券という証券会社のオーナーの方のコレクションで、芦屋の打出にあったのですが、43号線が通り環境が変わりましたので、山の手のものすごい高台に移りました。行ってみますと、ちょっと歩くのが大変ですが、眺めのすごくよいところです。さらに上に上がりますと迎賓館という高級レストランがあります。かなり健脚か、車でないと行けないところですが。

今回、夙川をどこまでとするか悩みました。厳密に住所でいくべきか、イメージでいくべきかと。例えば、最近まちを歩いていますと、JR立花駅近くのマンションも武庫之荘南とか書いてあるんですね。武庫之荘はイメージがいいからでしょうか。尼崎とはつけない。西宮では市役所あたりでも夙川とつけることがありますね。西宮中央部まで。夙川というのは西宮のかなり西部だと思いますが、イメージ的に夙川はブランドにしやすいということなんでしょう。ですから、迷ったんですが、一応、苦楽園、甲陽園、香櫨園、これ

は全部入るだろうと。それから東は広田神社、西宮神社のライン、札幌筋よりも西くらい。安井小学校の校区は夙川といえるんじゃないか。だいたいその方面にしました。上ヶ原地区は違うと思います。甲子園地区も甲東園地区もいいところですが、夙川地区は沿道ごとに小刻みに風景が変わって、いろいろいいものがあります。

残念なのが御茶家所町の2号線と夙川に囲まれた角っこの下の低いところ、あそこは画家の須田剋太さんのアトリエだったんです。『街道をゆく』の挿絵を描いた方です。そういう須田作品の美術館もあればいいなと思うんですが。須田さんは司馬遼太郎と仲がよかったので、司馬さんの住んでいる東大阪のお好み焼き屋に作品を寄付されてしまったんです。そのお好み焼き屋に行きましたら、壁中に貼ってあるんです。みんな見ていませんよ。お好み焼きを食べているんですから。でも無意識にでもそういう絵を見て育つとだんだん目が肥えてくるでしょう。環境ですね。これは西宮市の文化行政のミスだと思います。須田剋太の機嫌を損ねてしまったのか、寄付してもらえるものもほとんどもらえなかったんですね。人間関係というのは難しいですね。

話しは変わりますが、例えば、ムツゴロウという人がいます。あの人はNHKで紹介するのが一番向いているタイプなのに、最初に会ったNHKのスタッフがムツゴロウさんの気にさわったということで、絶対にNHKは受け入れないんです。NHKがいくら言ってもだめなんです。

桂小米朝さんは武庫之荘に米朝邸があるから、尼崎で育っているわけですよ。ところがアルカイクホールができたときに、出演してくれることになったんですが、最初に駐車場に車を入れるということでもめたらしいんですね、スタッフと。それで尼崎市のイベントには一切出演しないそうです。

例えば、村上春樹という人をわれわれが活用したいといっても、あんまり押しかけると嫌がられてしまったらかえって逆効果になってしまいます。ですから、そこが非常に兼ね合いが難しいところです。現在、苦楽園には小川洋子さんという芥川賞選考委員の著名な作家が住んでおられますし、西田ひかるさんがどこに住んでいるのか、どこで買い物しているのか。実は、叶姉妹の妹さんの方は夙川学院短大の卒業生なんです。絶対に言わないでくださいよ。私に言うなということ、言えということなんですけどね。

西宮に10大学ありますが、意外に夙川は大学が少なく、夙川学院短大と大手前大学だけです。大手前大学は大阪にある大手前という地名をとっていますが、震災で本キャンパスが全壊して、なかなか大変でした。市民に開放された立派な図書館がありますので、無料ですからぜひ活用していただきたいと思います。

夙川学院短大は高台にあって上ってくるのが大変ですけども、クリスマスのころにもいろいろなイベントをやっていますし、眺めも素晴らしいので、ぜひお越しいただけたらと思います。玄関前ピロティのところをビアガーデンにしたらいいなとも思ってしまうんですが。素晴らしい眺めのところで地ビールが飲めたらいいなと。

先ほど甲陽園、苦楽園、香櫨園の話をしました、西宮には西宮7園という七つの園が

あります。これが全部言えるかという、意外に難しいんですね。甲子園は分かります。甲東園も、苦楽園、甲陽園、香櫨園も分かります。あと分かりますか。西宮北口にありますね。甲風園と昭和園。それから阪神間では荘園という言葉の分解して、西宮では「園」を取ったわけですが、宝塚には寿楽「荘」がありますし、芦屋には六麓「荘」があります。それから武庫之「荘」、こういう名前を付けたのが割合ヒットして、いまのニュータウンは何とか台、何とか丘という名前を付けることが多いですね。何とか園と付けると、楽園であり、遊園であると。西宮には園が集中していて7つあります。イメージがいいところだと思います。関西をよく知らない方は甲子園というところは賑やかなところだと思っている人がいるらしいです。道頓堀に歩いていけると思っている人がいるようですが、来てみたら、パチンコ屋も建てられない風致地区だということにびっくりするそうです。品のいい住宅街ですからね。

甲子園に福永嫄生さんという方がお住まいですが、この方はラストエンペラーの姪御さんです。清朝最後の皇帝溥儀の弟さんの娘さんで、お姉さんの愛新覺羅慧生さんは昔、天城山心中で心中してしまいましたが、妹さんの方は、本当に普通に市民生活を送って来られた方です。最近、ご主人の福永さんがお亡くなりになられ、屋敷を手放してマンションに移られました。資料をどこに寄贈したらいいかという相談を受けているんです。大学に寄贈したら、奥にしまってしまってすぐに見られないという。ご主人が甲南大学を卒業しているから甲南大学でもいいんですが、できれば行政機関でちゃんとしたところに寄贈した方がいいと思います。西宮市の郷土資料館ではちょっと質も違いますし、図書館もどうかかなと思ったりして悩んでいるところです。そういう方が西宮にはたくさん住んでおられます。

例えば、作家の黒岩重吾さんが先年亡くなくなれましたが、この方は、直木賞の選考委員をやっておられました。奥さんが苦楽園の自宅にある黒岩の蔵書を寄付したいと言われたので、夙川学院短大もちょっと考えたんですが、うちは文学部がありませんので、結局、うやむやになっているうちに黒岩さんが戦争中に疎開した奈良県と三重県の境目のあたりの田舎の小学校に全部寄贈されてしまいました。向こうは非常にありがたいといって大切にしてくれているようですが。そういうことがしょっちゅうあります。やっぱり西宮市民としてはもったいないなと思います。

あまりヒントにもなりませんでしたが、先ほど申しましたように人物にやや重点を置いて問題をつくってみました。例えば、西宮神社の中に岩倉具視の家があったとか、これは移築したものですが、そういうことを私も最近まで知りませんでしたね。何十年と住んでも、まったく知らないことだらけで、本当に私たちの西宮は、とくに夙川というところは奥が深いんだなと思います。ですから、そういう名前を付けた夙川学院短大をぜひよろしく願いして終わりたいと思います。

気楽に読んでいただければと思います。できればまた来年もやってみたいと思います。よろしく願いいたします。 (終了)